Kurume SHIN-AI women's College

久留米信愛女学院短期大学研究紀要，第 36 号，112～122，(2013)
KURUME SHIN-AI WOMEN'S COLLEGE BULLETIN, No.36, 112～122, (2013)

『深い河』
― 印度への旅・美津子の場合 ―

二 平 京 子

"The Deep River"
― Mitsuko's journey to India ―

NIHEI Kyoko

Abstract

Mitsuko is a woman seeking within herself something that she could believe in. However, she is tormented because she is unable to find it. She suffered from an empty feeling inside her. This may be the reason why she tempted Otsu, or she simply wanted to be distracted from that emptiness. It is also possible that she wanted to fill that void with something she had seen in Otsu. She toyed with him then discarded him. However, strangely, she could not forget him.

In this report, I will examine Mitsuko's journey to India in pursuit of Otsu. While on this trip, she discovered the Hindu Goddess Chamunda. Chamunda is a goddess whose figure of a loving mother in torment. Consequently, Mitsuko is able to fill that emptiness and open her heart to others. In the Ganges River, of her own will, she takes a bath and realizes that she is a member of the group who prays for salvation. She embraces eternity at the point of the river. Through this experience, the feeling of emptiness in her heart is almost healed.

However, at that time, as a result of trying to protect the people, Otsu meets with an accident and is taken to the hospital. Otsu led his life in accordance to Jesus, he served the poor. Mistuko believes that Otsu will die and she is lamented that he has lived his life in vain.

Mitsuko will continue to think about the life of Otsu from then on.And, she will discover the existence of Jesus within herself. And, she will discover the existence of Jesus within herself. Then, as it had been with Otsu, Mitsuko will realize that Jesus had been living in her heart.

Key words: Soul, Goddess Chamunda, Ganges River, Reincarnation
キーワード：魂、女神チャームンダー、ガンジス河、転生

一　はじめに

遠藤は、佐藤泰正氏との対談（『人生の同伴者』）で、「次は『スキャンダル』の続編で悪の問題を更に深めたい」と述べていた。しかし、遠藤の文筆活動の集大成とも言うべき『深い河』では、〈悪の問題〉から、〈魂の問題〉へと構想が変化し、このテーマを担う人物として成瀬美津子は造形された。

さて、遠藤がカトリック作家として歩み始める際に大きな影響を受けた作家に、フランスのノーベル賞作家フランソワーズ・モーリヤックがいる。彼はその代表作『テレーズ・デスケルー』の中で、一人の女性の怖ろしくも痛ましい〈魂の渇き〉を描いた。

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

モーリヤックはそのテレーズの魂を救おうと幾度も試みながら、遂にそれを達成することはできなかった。遠藤はこのモーリヤックの残した重い課題を、自らの最後の作品をもって、つまり美津子の人生をとおして果たそうとした。[註1]

本稿では、その〈魂の渇ける女〉としての美津子の歩みを辿りたい。そして、遠藤の生涯の〈宿願〉がどのように達成されていったのかを読み取りたい。

二　魂の渇ける女

1　大津との出会い

主人公成瀬美津子は、上智と思しき大学の仏文科に在籍し、娘を徹底的に放任する資産家の父の援助によって、贅沢で奔放な生活にのめり込んでいる女性として登場する。彼女は、真面目さだけが取り柄のような学生大津を誘惑して弄び、棄て去る。しかし、そのような行動の奥に潜む美津子の内面は誰にも理解される事がない。例えば、彼女の中では、「生活」と「人生」との峻別[註2]がなされ、彼女は心奥に非常に強い「人生」への志向を持つ女性として描かれているのである。また、この事件の前後では特に、「虚ろ」「虚しさ」「底冷えのような空虚感」といった言葉が散在している。大津を弄んでいるその時にも、冷めた眼で愚かな自分を見つめ、心を苛立たせているのである。

しかし、更に確認を要するのは、この愚行の動機である。美津子は敬虔なクリスチャンの大津に〈チャペルに行かない〉事を、〈ボーイ・フレンドの一人にする〉条件として彼に迫る。奇異な話である。

彼女は信じてもいない神に話かけた。子供が空想の友達を作って話しかけるように。「神さま、あの人をあなたから奪ってみましょうか」

この点から、美津子の誘惑の背後には〈神さま〉への挑戦が込められていたとわかる。〈神〉を〈いらいらするし、実感がない〉存在として厭い、キリスト教を〈独善〉的、〈偽善〉的と容赦なく批判する彼女を、「宗教を否定」する人物とする捉え方もあろう。[註3] しかし、それは寧ろ逆かも知れない。つまり、美津子の極端なこの姿勢は、むしろ逆転の可能性を大いに秘めた、彼女らしい神への拘りであったのではないか。先で確認したい。

2　美津子とテレーズ・デスケルー

美津子は卒論に、『テレーズ・デスケルー』を選んだ。その主人公は若い人妻である。彼女は、夫ベルナールに毒を盛った咎で拘束されたが、夫の家名を保つためだけの偽証によって免訴となり、今、自分の住むアルジュルーズに戻ろうとしている。暗黒の闇の森を縫うように進む乗り物の中で、彼女は夫への〈告白〉の言葉を探しつつ、自らの心の闇を辿る……。

遠藤文学の一つの原型ともいえる『テレーズ・デスケルー』のテレーズ像と美津子の造形には、特に心理の動きに興味深い重なりが多い。遠藤自身が、フランス留学中にテレーズの道行を徒歩で辿った際のエッセイ「テレーズの影をおって（サン・レジェールの森）」より引用したい。

「生きたかったからだ！」（中略）羊歯と松との森の中を腫れ上がった足を曳きずりながら、ぼくは貴女のその叫びをきいていた。（中略）「生きたかったからだ。私が夫に毒をもったのは生きたかったからだ。少なくとも生の全てを割り切れるベルナールのような人間の眼のなかに、私と同じような死の不安を見たかったからだ。（中略）……何故、何故、この生の窒息の中にもう堪え切れなくなった時人間は何故他人を傷つけねば生きられないのか。

このように、自ら〈テレーズの影〉を辿り彼女と対話してきた遠藤は、美津子にもその心の闇を歩ませる。美津子もまた、テレーズに似て、自らの〈破壊的〉な〈衝動〉を、極めて〈月並みな〉夫の中に〈埋没〉させる結婚を〈本気で真面目に望〉み、フランスへの新婚旅

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

行の途上では、夫を独りパリに残し、『テレーズ・デスケルー』の舞台、〈砂地と松林がどこまでも拡がる荒地〉を見るために彼女の故郷サン・サンフォリアンに向かう。猛暑には松の枝が擦れ合って火を噴くという、その荒涼たる大地は美津子自身の心象風景に他なるまい。

そのような結婚は、美津子に離婚という〈人生〉の大きな挫折を与えるが、彼女はその時の絶望感を、なぜかフランスにいる大津に伝えている。美津子に〈棄てられ〉た大津は、その苦しみの直中でイエスの招きの〈声〉を聴き、今は神父になるために〈リヨン〉の修道院にいた。それにしても、なぜ大津なのか。美津子自身にも、それがわからない。何の魅力もない、寧ろ軽蔑の対象でしかない大津の後を、美津子は追っていくことになるのである。

わたくしは事情あって離婚しました。離婚の理由は……たまたま年末に福田恒存のホレイション日記を読んでおりましたら、次のような私自身の本質をあらわしたような言葉にぶつかりました。——わたしは人を真に愛する事はできぬ。一度も、誰をも愛したことがない。そういう人間がどうしてこの世に自己の存在を主張しうるだろうか——これが結局はわたくしの離婚の理由です。玉ねぎは何でも活用すると、罪さえもという、あの言葉、信じていらっしゃいますか。

また美津子はこれに近い個所で次のようにも思う。

愛が燃えつきたのではなく、愛の火種のない女。男との愛欲の真似事だけは何度もやったが、火種に本当の炎がついたためしはなかった。

ここに至り、美津子の自己洞察は極みに達し、自虐的にさえ感じられる。美津子はこれまでにも「あなたは何を求めているの」「何を探しているの」と自問し、その答えを見出せずに苦しんできた。しかし、ここにおいてその答えは、明らかである。それは、〈愛する事〉、しかも〈真に愛する事〉。美津子は我知らず〈真に愛すること〉を強く求め、その真似事の虚しさに深く傷付いているのである。〈人を真に愛する事はできぬ〉との告白を裏返せば、心の深みでは、彼女がいかに真実の愛を生きることに飢え渇いているかがわかる。加えて、〈玉ねぎは何でも活用すると、罪さえもという、あの言葉、信じていらっしゃいますか[註4]〉という皮肉な言葉の奥からも、必死に耐える懸命な姿が浮き上がってこよう。テレーズを形容した〈魂の渇ける女〉は、美津子において「愛することに飢え渇いた女」と言い換えられよう。

美津子は離婚後、病院でのボランティアを始める。しかし、美津子は自分の〈それが心の底から出た愛の行為ではなく、演技だということを知っていた。〉

美津子は、抵抗できぬ老婆の眠っている姿を、見つめているうちに、急にある衝動にかられ、わざとおむつを替えるのを忘れたふりをしたり、飲ますべき薬を患者に渡さなかったことも、あったのである。（どうせこの人は薬を飲んでも治らぬ病人なんだから。もう誰の役にもたたぬだけでなく、家族にも重荷になっているこの老女を早く楽にしてあげたほうが、よほど良いことだわ）

美津子は、患者に対する自分自身の冷たい視線や心の動きに耐えつつ、これを続ける。意識の上では〈真似事〉だという、確かに真心の籠った行為とは言い難い活動ではあっても、ここにこそ、彼女なりの愛の模索の出発点があったのではないか。こうした意識や自我に逆らうところから生じる小さな動きにこそ、美津子の変容の萌芽を見出す事ができるように思われるのである。この点で、美津子の歩みは、最後まで闇の心に留まり続けたテレーズのそれとは、袂を分かつものとなるのである。[註5]

三　印度への旅

1　大津の存在

離婚の後、美津子は印度へのツアー旅行に参加する。印度と何の接点もない彼女の旅行の目的は、どう考えても既に神父になって、イン

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

ドにいる大津に会う事以外にない。しかし、美津子はそれを強く否定する。この反応は、これまでにもしばしば認められたものではあるが、この〈意識〉と〈無意識〉との乖離は美津子の心理的特徴として非常に重要である。彼女の〈無意識〉に注目してし過ぎることはない。次の引用は、大津のいる土地に向かうバスの中での例である。

人々は窓に顔を押しあてた。（中略）乗客のそれぞれは、江波の言う別の次元の領域に足を踏み入れた。（中略）蛍火のようにみえた小さな灯が、少しずつ両手をひろげる。空に反射する光りの拡がり。美津子はその光りの一点に彼女とはまったく別の生きかたをしている大津がいるのだと思った。大津のことなどなぜ、昔も今も気になるのだろう。それが彼女にはよく、わからない。蜘蛛の巣にひっかかった虫の残骸のように大津の存在が美津子のどこかにぶらさがっている。（会う必要はない）と彼女は何度も自分に言いきかせた。（ヴァーラーナスィに行っても、わたしはあんな人を探したりしない）（傍線：二平　以下同様）

ここでも、二つの想いが衝突しているが、顕著なのは、大津との再会を求める〈無意識〉の描写のリアルさである。引用文に傍線を付してみた。さてここで、私が美津子の変容の原動力と考える、この〈無意識〉について、確認しておきたい。元来、キリスト教小説（フロイトの影響下にある、例えばモーリヤックやJ・グリーン等）において「無意識」は抑圧の集積であり、罪の温床とされてきた。しかし、この立場に違和と疑問を感じてきた遠藤は、ユングの、クリエイティブな〈無意識〉理解に深い共感を持った。しかし、彼は更に踏み込み、ここに、「神を志向する種」を予感している。[註6] 実際、この立場こそが美津子を巡る『深い河』の飛躍的な展開と深まりを生んだと言える。その美津子の〈無意識〉が一挙に活性化する場面を考察したい。

2　印度の母、女神チャームンダーとの邂逅

ツアーの一行は女神たちの立ち並ぶ寺の地下に〈降りて〉行く。そこには〈印度のもつ淫猥なじっとりとした空気がこも〉り、〈気味の悪い彫像〉が浮かび上がっていた。この〈気味の悪さ〉には〈人間がおのれの意識下にうごめくもの、意識下に隠れているものをまともに眼にする嫌悪感があった〉と語り手は記す。美津子もまた〈心の奥に入っていくような気がし〉、〈内視鏡で心の奥を覗くような不安と快感〉を味わっているが、これらの記述から、この空間が〈心の奥〉〈意識下〉つまり、〈無意識〉の世界の投影として描かれている事がわかる。

チャームンダーは、添乗員江波によって紹介される。

彼女の乳房は老婆のように萎びています。でもその萎びた乳房から乳をだして、並んでいる子供たちに与えています。（中略）長い間、印度人が苦しんできた全ての病気にこの女神はかかっています。コブラや蠍の毒にも耐えています。彼女は……喘ぎながら、萎びた乳房で乳を人間に与えている。これが印度です。

江波はこの時、〈顔をゆがめ〉〈泪のような〉汗を滴らせ、〈夫に捨てられながら色々な苦しみに耐えて、彼を育ててくれた母〉を女神に重ねて語ったとある。女神は〈聖母マリアのように清純でも優雅でもな〉く、〈逆に醜く老い果て〉、〈つりあがった苦痛に充ちた眼〉で〈印度人と共に苦しんでいる〉と。こうして、江波は女神の中に、自らの〈母〉を見、更に〈印度の母を〉見出しているのである。

さて、美津子は女神チャームンダー像との出会いの後、この時の体験を〈この街に来てよかったのは、あの暑さと息苦しさのなかで耐えた二十分だった〉と述懐している。彼女が耐えたのは、単に、地下の〈蒸風呂〉のような空気だけでなく、寧ろ自らの〈心の奥〉の在り様を投影する世界を直視した時間を指していたのではなかったか。

印度にきて次第に興味を起こしたのは（中略）清浄と不潔、神聖と卑猥、慈悲と残忍とが、混在し共存しているヒンズーの世界だ。釈迦によって浄化された仏跡を見るよりも何もかもが混在している河のほとりに一日でも

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

残っていたかった。

美津子の言葉である。女神たちに生命の根源的な姿を見る時、その両面性を憚ることなく表現したその像の中に、彼女は自分自身を見出し、その姿を受け入れていくのである。その意味で、〈慈悲と兇暴とが共存した〉女神像に〈心ひかれ〉〈そのどちらも自分だ〉と感じていたとの述懐は注目に値する。〈混沌〉とした自己の中に〈慈悲〉を見出している点に、大きな自己認識の転換が認められよう。〈否定あり き〉的美津子の内面が、動き始めているのだ。更に重要な点は、美津子の〈母〉発見にある。

心に突きささったものは、江波が説明してくれた女神チャームンダーのハンセン氏病にただれ、毒蛇にからまれ、痩せ、垂れた乳房から子供たちに乳を飲ませているあの姿である。そこには現世の苦しみに喘ぐ東洋の母があった。

遠藤の文章に読点の多用は少ないが、ここでは女神の四つの容態が読点で区切られ、積み重ねられている。この表現は、人間を襲うすべての痛みと苦しみを自らの身に引き受け、なお絞り出すかのように乳を与え続けるチャームンダーの姿が、美津子にとっていかに大きな衝撃であったかを伝えている。

ところで、作中には母との関わりの深い登場人物が多い。しかし、美津子の過去に母親の存在は全くない。美津子の、〈愛することができない〉との悲惨な心奥の悩みは、ここに起因していると考えられる。母親不在の虚無である。しかしこの時、江波の説明とチャームンダーの姿とは一つとなって、美津子の深く大きな空洞を、満たしたのではなかろうか。この推測を裏付ける直接的な記述は作品中にない。しかし、その後に生じている美津子の変化は、この解釈なしに説明できないのである。その変化の幾つかを確認したい。

愛のまねごとはもう欲しくなかった。本当の愛だけがほしかった。

美津子は、自分が気付かずに求めてきた〈本当の愛〉の姿をチャームンダーの姿の中に見出し、このように思っているのである。

また、彼女は、ガンジスに運ばれてくる遺体の中に、もう一人のチャームンダーを観ているが、この点にも注目される。美津子はそれまで、〈自分の孤独だけで精一杯〉だと他者の苦しみや悲しみに固く心を閉ざし、有用性がないと〈老女〉を軽視し、〈早くらくにしてあげるほうが、よほど良いことだ〉とまで考える女性だった。ところがここでは、老い果てた名も無い老婆の遺体に、苦しみに喘ぎつつも自らを与え尽した人間の尊さを見出しているのである。ここにも、美津子の大きな内的深化を認める事ができよう。

ところで、加藤憲子氏は「遠藤周作『深い河』論—チャームンダー女神の意味するもの(註7)—」において、美津子が窓から射しこむ〈白い光〉の仲介によって、呼び覚まされたイザヤ書の聖句からイエスの〈みじめで、みすぼらしい〉姿が浮かび、〈その人の上に女神チャームンダーの像が重なり〉、それにフランスで見た〈大津のみすぼらしい後ろ姿がかぶさ〉るという美津子の描いたイメージを取り上げている。氏は、武田秀美氏の、先の三者を〈人類の救いにおいて共通する受難の存在〉とする指摘を踏まえ、チャームンダーを〈作中に提示される神のイメージを端的に体現している存在〉であるとし、更に、チャームンダー像に見られる老婆性に着目し、ガンジスを求めて息絶えた〈老婆〉たちの中に、美津子は〈自分の救済者を見〉ていると論じている。それは、美津子の〈ミイラのようだった老婆の死体。もしその布を剥がせば、そこからはあの崩れた女神チャームンダーが現われるだろう〉といった述懐に基づくものと思われる。しかし、そうであろうか。遺体の許に佇む美津子の想いの中で注目すべきは、苦しみ抜いて亡くなったに違いない〈老婆〉の中に、揺るがぬ尊厳を彼女が見出し得た事と、〈それぞれの人生の苦しみ、それぞれの泪の痕〉を残して生きる者同士としての深い連帯感にあったと思う。女神チャームンダーとの邂逅によって、彼女は心を自他に広く開くことができた。生

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

きる事の真の意味にも眼が開かれていく。しかし、〈老婆〉は元より、女神チャームンダーの中にさえ、美津子が〈自分の救済者を見〉たとする記述は見出し難い。美津子にとって、それはもう少し先に期待すべきことであろう。

前に戻りたい。先に記したような美津子の内的変化は、何よりも大津の生き方への理解に繋がっていく。この点を見落とすことはできない。これまで、彼女は大津から直接、或いは手紙によって重要なメッセージを多々受けてきた。しかし、その真意が彼女の心に届くことはなく、神父でありながら、ヒンズー教徒をガンジスに運び続ける大津など、彼女にとっては〈役にも立たぬ幻影のために人生を無駄にしている〉愚かな男でしかなかった。しかし、チャームンダーを知った後の美津子は、〈大津の言葉は大津の苦しいだろう生き方に裏うちされていた〉と、その生き方を受け止めるまでに至り、更に〈普通の人から見ると馬鹿な生き方〉でも〈ここに来て、わたくしにはなんだか馬鹿でないように思えてきましたの〉とそれを肯定する言葉をも発している。まだ深い共感とは言えなくとも、その真価に目が開かれたことに間違いはない。

3　沐浴

印度に来て、美津子の心が自分自身と他者、特に大津に開かれていく様を辿ったが、その動きはガンジスのほとりで更に顕著となり、〈沐浴〉へと導かれ、そこで彼女は〈永遠〉なるものにまで心を向けることになる。また、美津子の思いの中で、〈人々が死んだあと、そこに流されるために遠くから集まってくる河ガンジス〉と、これに身を浸す人々の〈人生〉とは不可分に結ばれている。特に、ここに集まるどのような人の〈人生〉をも、一つとして拒むことのないガンジスを、大津が〈玉ねぎの愛の河といった河〉として思い起こし、更に、大津の死者を運ぶ行為を〈十字架を背負うように背負って〉と捉え、イエスの受難の姿と重ねて受け止めている点には重い意味があろう。また争いに満ちた現実世界の対極にあるこの大津の生き方を、意識では〈何の役にもたたない〉と否定しながら、火葬場付近に大津を幾度も探す美津子の姿からは、彼の存在の大きさがはっきりとわかるのではあるまいか。このような、自己と他者に開かれた美津子の心が、思いもかけない〈沐浴〉という大きな決断へと美津子を駆り立てたのだと思う。

それにしても、その決心はいつ、どのように行為化したのか。ここで、美津子の動きを整理してみると、彼女はガンジスの岸辺で、木口の戦場での話に傾聴し、彼が戦友たちに経文を唱え始めた時、その場を離れている。次に彼女が姿を現すのはガートの階段で、インディアン・タイムスに目を通している。ここまでに沐浴を窺わせる記述はなく、その後に、まだ読経中の木口にサリー姿で声を掛け、河に下って行く。となれば、決意したのは階段に腰を下ろして新聞を読んでいた時からその後の、僅かな時間に限られる。この間に、何か衝迫的な促しがあったはずだが、そこにあるのは、流血を伝える新聞のニュースと、美津子がそこに、十字架上のイエスと大津の惨めな姿を重ねて思い描く「イザヤ書」の言葉。それはテーマ音楽のように、作中に何度も繰りかえされた、前表としてのイエスを描いた聖句である。

彼は醜く、威厳もない。みじめで、みすぼらしい／人は彼を蔑み、見すてた

（中略）まことに彼は我々の病を負い／我々の悲しみを担った

他には、赤犬や禿鷹が死体の肉をついばむ火葬場の様子と、〈一頭の痩せこけた牛〉の存在があるだけ。こうしたものに一体、どのような意味が隠されているのだろうか。ここでは、次の一文に注目したい。

ふと気付くと一頭の痩せこけた牛がそばの石段で、美津子と同じようにそんな光景をうるんだ眼で見ていた。

この〈うるんだ眼〉は『満潮の時刻』をはじめ、遠藤の作品のキーワードである。また、〈痩せこけた〉からは、伏線として置かれた「イ

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

ザヤ書」の描く、疲弊したイエスの〈特に受難の〉姿が連想される。更に、〈うるんだ眼〉には、〈憎しみ〉や〈戦い〉に満ちたニュースや、痩せこけた遺体に象徴される人々の苦しく悲しい〈人生〉を自らのものとし涙を湛える「基督の眼」が重ねられていよう。

そして、より重要だと思うのが、ここで美津子の眼差しが、イエスのそれと合一化したことを示す、〈美津子と同じように〉という部分である。つまり、それは人間の哀しみを自分のものとして背負い、涙するイエスの眼に、美津子の眼が重なったことを示し、このような眼で見た時、全ての〈人生〉を分け隔てなく〈受け入れ〉〈包み〉〈運ぶ〉ガンジスが、全身を浸し得る河として美津子の前に立ち現れたのではなかろうか。ただ感動して眺めることと、自らをその中に浸すことの間には本質的な相異があろう。また、この行為には、キリスト教の死と再生を意味する洗礼の儀式が踏まえられているとの、山根氏の指摘[註9]を受け入れれば、ここに美津子の新しい魂の誕生を見る事が可能となる。その沐浴は次のように描かれている。

美津子は河の流れる方角に向いた。（中略）視線の向こう、ゆるやかに河はまがり、そこは光がきらめき、永遠のもののようだった。／「でも、わたくし人間の河のあることをしったわ。その河の流れる向うに何があるのか、まだ知らないけど。でもやっと過去の多くの過ちを通して、自分が何を欲しかったのか、少しだけわかったような気もする。」／彼女は五本の指を強く握りしめて、火葬場の方に大津の姿を探した。「信じられるのは、それぞれの人が、それぞれの辛さを背負って、深い河で祈っているこの光景です」（中略）「その人たちを包んで、河が流れていることです。人間の河。人間の河の悲しみ。そのなかにわたくしもまじっています」

〈河の流れる方角に〉からは、美津子の流れに身を委ねた自然で受容的な心の姿勢が感じられる。そして、それだからこそ、視線の先の〈永遠そのもののよう〉な輝きに気付く事ができた。これまで、ガンジスは江波や大津をとおして〈母なる河、〉〈聖なる〉河、[註10]そして〈玉ねぎの愛の河〉と捉えられてきたが、今、美津子は死を超えて〈永遠〉へと続く河、と〈実感〉している。この宗教的な美しい場面で一際輝くのが美津子の祈りの言葉である。

ここでも初め、美津子の意識は、〈真似事よ〉との自己弁護を忘れないが、すぐに無意識の力に押され、その言葉と姿は祈りの形になっていく。祈りの中で、美津子はガンジスを〈人間の河〉と呼び、〈そのなかにわたくしもまじっています〉と結んでいる。〈そのなかにわたくしもまじっています〉——彼女にとって「連帯」という愛の感覚ほど縁遠いものはなかった。常に心を固く閉じて背伸びをし、真の関わりを拒んできた彼女の、このような祈りの声を聴く時、双方には隔絶の感がある。

〈それぞれの辛さを背負って深い河で救いを祈っている人たち〉。そして、その人間たちを包んで輝きながら静かに流れて行くのがガンジスの河。人間の〈悲しみ〉を悉く知るが故に自ら〈悲しみの河〉と化したガンジス。美津子がこのような河を、エゴの塊のようなこの地上に見出し、信じ得た事には大きな喜びと希望がある。

その意味で、山根氏の「美津子の魂は他者とのつながりを回復すると共に（中略）自らを含む、より大きな母なるものとのつながりをも回復している」との指摘は傾聴に値しよう。先に、美津子に母の不在を見たが、そこから生じた大きな深い空洞が、チャームンダーを経て、〈より大きな母なるもの〉によって満たされ、回復されたとする解釈としても意味深い。多少強引に過ぎようが、少なくとも美津子において、〈より大きな母なるもの〉とは〈永遠なるもの〉、或は〈愛なるものと換言できよう。そうであれば、今は漠然としてはいても、美津子が本当に〈欲しかった〉ものがどのようなものであるのかは、先で（実は、作品が閉じた後にと考える）自ずとはっきりしよう。

もう一点見落とせないのは、ここでも大津の存在である。美津子は沐浴の僅かな間に二度火葬場に目をやり、彼の姿を探している。この

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

性急な動作は、この沐浴が大津という存在なくしてあり得ない行為であることを示し、それは大津理解の急速な深まりの顕れと考えられる。更に言うなら、自らの〈「新しい魂の誕生」〉の場に立ち会い、同伴する存在としての大津を、美津子は無意識の内に求めていたのかも知れない。

しかし、それは叶わなかった。大津が、禁制を破った新米カメラマンを、ヒンズー教徒の怒から庇い、首の骨を折る重傷を負ったからである。河の中から彼を探し続けていた美津子はいち早く気付き駆け寄る。

「馬鹿ね、本当に馬鹿ね、あなたは」と運ばれていく担架を見送りながら美津子は叫んだ。

「本当に馬鹿よ。あんな玉ねぎのために一生を棒にふって。あなたが玉ネギの真似をしたからって、この憎しみとエゴイズムしかない世のなかが変る筈はないじゃないの。あなたはあっちこっちで追い出され、揚句の果て、首を折って、死人の担架で運ばれて。あなたは結局は無力だったじゃないの」

しゃがみこんだ彼女は拳で石段をむなしく叩いた。

この余りにも無惨な結末に、どのような意味が見出されるのだろうか。ここでは美津子の立場に限って考察したい。

美津子の自我は余りにも非情な現実に打ちのめされ、このように叫ぶ。確かに、世間的、或いは人間的に見る限り、大津の生きざまは無力そのものであり、やっと流れ着いたガンジスで、大津が引き受ける人生の結末は誰の目にも惨めである。

また、美津子の言うとおり、大津のひそやかな行為によって、〈世のなかが変わる筈〉などあり得ない。あり得ないが、大津はそのような社会変革を願って、死者をガンジスに運び続けたのか。勿論、そうではなく、彼の望みは一つ。〈おいで〉と呼ばれたイエスに〈愚直について行くこと〉、それだけだった。イエスは、そして大津も飽くまで一人ひとりの悲しみに寄り添い、それを背負うことに命を懸けたのだ。遠藤の描くイエスが〈あっちこっちで追い出され〉たように、大津も結局〈あっちこっちで追い出され〉た。不思議な事ではない。

だからいつか、美津子も必ず気付くことになろう。彼女の自覚に反して、自分の歩みの全てに、大津がいかに大きく関与していたかということを。少なくとも彼女の〈人生〉において、大津は決して〈無力〉な存在などではなく、むしろ唯一人の同伴者であったのだと。

そして、もうひとつ。その事故の二日後、一行は帰国の朝を迎えるが、この間を、美津子はどのような想いで過ごしたのだろうか。これについては一切、記されておらず、それはいかにも不自然である。それだけに、その朝の〈マザー・テレサの尼さんたち〉との出会いの意義は大きい。

「わたくしは日本人です」

と美津子は白人の修道女に話しかけた。

「何のために、そんなことを、なさっているのですか」

「え」

修道女はびっくりしたように碧い眼を大きくあけて美津子を見つめた。

「何のために、そんなことを、なさっているのですか」

すると修道女の眼に驚きが浮かび、ゆっくり答えた。

「それしか・・・この世界で信じられるものがありませんもの。わたしたちは」

それしか、と言ったのか、その人しかと言ったのか、美津子にはよく聞きとれなかった。その人と言ったのならば、それは大津の「玉ねぎ」のことなのだ。玉ねぎは、昔々に亡くなったが、彼は他の人間のなかに転生した。二千年ちかい歳月の後も、今の修道女のなかに転生し、大津の中に転生した。

美津子はここで、突飛で不躾な問いを、二度も繰り返している。それは、彼女にとって尋ねずにはいられない問であった。修道女はその問いに驚きつつも、〈ゆっくり、答えた〉。つまり、粗略な返答ではないということである。〈それしか……この世界で信じられるものはありませんもの〉と。

〈この世界〉とは、作品の中で、何度も嘆きをもって触れられた、

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

エゴの炸裂するところ。希望も平和も見出し難い世界のことである。ここには、もう〈信じられるものがない〉と修道女は言った。ただし、〈それ〉以外には、と。この返答が美津子の魂にしっかりと届き、大きな確信を生んだことは、引用文の後半から明らかである。

つまりそれは、〈転生〉についての確信である。かつて、大津が〈転生〉について語った時、美津子は〈よく、わからない〉〈別世界の話を聞いているような気がする〉と、強く退けた。しかし今、美津子は〈転生〉を現実と捉えている。この力強い断定表現はそれを示していよう。玉ねぎの愛は、死によって消えてしまうものではなく、死さえも超えて、人の心に宿り、人を生かし、突き動かす〈働き〉だということである。

この確信を得て、〈美津子は江波のそばに駆けよって頼んだ〉のである。急に大津を思い出したのか。

「私の友人が、一昨日、怪我をして入院したんです。（中略）容態をききたいんです」

この電話で大津の状態が一時間前から急変し、危篤に陥ったと聞かされる。そして、そこで突然、『深い河』は閉じられているのである。そこで、この結末の意味を、美津子の〈魂の旅〉と関連させて考えたい。急ぎ結論から言えば、この結末を、美津子の〈魂の旅〉の新たな始まりへの示唆と捉えたいのである。考えてみたい。

まず、この時点までに、彼女は二つの事を、〈わからない〉として保留していた。一つは、〈玉ねぎのことなど何も知らなかったが〉という彼女の言葉、二つ目は、〈永遠のもののよう〉に〈光がきらめ〉くガンジスの流れの向うに〈何があるのか、まだ知らないけど〉と述べていた箇所である。この二点に加え、私は自分の疑問、つまり遠藤はなぜ大津の事故後の二日間を空白にしたのかという点を考えたい。というのも、旅先での発熱に苦しむ木口への親身な介抱や、ガンジスで掴んだ、苦しみの中で合掌する人々との宗教的な連帯感、そして急速に深まった大津理解——このどれをとっても美津子が大津の事故に最後まで立ち合わなかったことには違和感が残る。美津子は二日間、重傷を負った大津から身を引いていたのである。

ここで、大津が美津子に語っていた次の言葉が思い出される。

玉ねぎが殺された時、玉ねぎの愛とその意味とが、生きのびた弟子たちにやっとわかったんです。弟子たちは一人残らず玉ねぎを見棄てて逃げて生きのびたのですから。裏切られても玉ねぎは弟子たちを愛し続けました。

玉ねぎは死にました、でも弟子たちの中に転生したのです。

弟子たちは、イエスの死に立ち合わなかった。〈見棄てて逃げ〉たとある。だからこそ、彼らはイエスの死の意味を切実に問い続けることになった。不幸なことではあったが、より深く、そして徹底的にその意味を〈弱虫〉の弟子たちが求め続け掴み取るために、〈見棄てて逃げ〉ることさえも許されたのだろうか。もし、そうだとすれば、遠藤は美津子にも、その結び付きをより堅固なものとするために、この〈二日間〉のブランクを与えたのかも知れない。大津の危篤の通報を死の予告と受け取るならば、その時から、二人は新しい次元の関わりを築くことになると考える。

振り返ってみると、大津は〈玉ねぎ〉について、非常に多くのメッセージを美津子に送っている。自分の彼への想いについても既に十分に語っていた。また、手紙は美津子の手元にしかと保管され、交わした会話は美津子の記憶にはっきりと収められていると読み取れる。だから美津子が、これまで〈よくわからない〉〈実感がない〉と、距離を置いてきた大津の言葉を、日々咀嚼する可能性は高いと思う。そうなれば、修道女とのごく短い対話で、〈玉ねぎ〉の〈転生〉[註11]を一挙に悟ることのできた美津子は、大津の生の神髄をも鋭く掴み取ることになろう。

その時には、自らの歩みの上にも、大津をとおして〈愛の働〉きが起動していたことに気付くはずだ。いや、既に半ば、美津子が気付い

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

ていたことは記されている。大津の手紙を遥々印度まで持参した訳を自問する場面がそれである。

なんのためにそんなものを大事に保存してきたのだろう。その理由も美津子にはわからない。わからないが、自分をこえた何かが彼女にそうさせたのだ。その何かが秘かに段取りをつけて、彼女を大津の住むこのヴァーラーナスィに連れてきたとも言える。

〈段取りをつけた〉〈自分をこえた何か〉――美津子はこれを、大津の主張していた〈愛の働〉きだと、漠然とではあっても、既に〈実感〉していた。そうであれば、その〈愛の働〉きが自分の上にあったことを認め、受け入れるまでには、いま一歩の隔たりしかないと思う。その時には、大津の〈神は存在というより働きだ〉との主張の意味を更に深く悟ることになろう。

思えば、美津子が離婚の後の孤独な苦しみの中にあった時、大津はフランスから次のような手紙を認めていた。

あの方はいつかあなたをもうひとつの世界に連れていかれるでしょう。それは何時なのか、どういう方法でか、どういう形でかは、ぼくにはわかりませんけれども

彼が美津子に与えたこの言葉の実現は近い。大津の死はこれに大きく作用することになろう。〈玉ねぎ〉に何処までも愚直に従い、瀕死の人間に〈アープ、メーラー、ドースト、ヘイン（わたし、あなたの友だちだ）〉と語り続け、その愛に殉じた大津の〈人生〉の意味が美津子の魂に深く刻まれ、彼女を〈玉ねぎ〉に導くと読み取るのである。

かくて、抗いながらも大津に導かれた美津子の印度への旅は、美津子の魂の〈渇き〉を癒し、その意味で、〈魂の渇ける女〉の救いは実現したと言えよう。しかし、美津子にとって、それは新たな魂の旅の始まりに他ならない。『死海のほとり』流に言えば、〈俺のイエス探し〉の旅とも言えようか。作品のこの突然の幕切れに、私は作者のそのような意図を見るのである。

四　おわりに

美津子の歩みを辿り、彼女の未来に想いを馳せながら、この考察を閉じる今、前に記した『テレーズ・デスケルー』の悲惨な結末が気になってならない。紙面の都合上、二点の指摘に止めたい。まず、〈人間の河〉。

テレーズは人間の河をじっと眺めた。この生きた集団が自分のからだの下で口をあけ自分をまきこみ、ひっさらっていく。もう何もすることはない。〈人間の河〉という同一の語に託された内実の無限の隔たり。テレーズはこの〈人間の河〉を眺めながら、〈孤独というものも、もう恐くはない。じっとしていればそれでいいのだ。〉という。

そして二点目。モーリヤックは、一人ぼっちになった彼女を次のように描いて重い幕を閉じる。

テレーズは酒を少し飲み、煙草をたくさんふかした。満ちたりた女のように一人で笑い、念入りに頬紅をつけ、口紅をひき、それから道にでて気のむくまま歩きだした。

残酷な描写である。テレーズは、〈満ちたりた女〉を装い、虚しく〈一人で笑〉っている。化粧で自分を隠し、まさに今、〈自分をまきこみ、ひっさらっていく〉〈人間の河〉に歩み出そうとしている。死んだように〈じっとしていれば〉、本当に〈孤独〉も怖くはないと言えるのか。

こうして苦悩するテレーズのリアルな姿を見つめる時、彼女が九十年も昔に描かれた女性だとはとても思えない。それどころか、連帯を大きく失い傷ついた現代社会の直中にこそ（毎年、3万人もの方々が自らの命を絶っておられる）、もう一人のテレーズが苦しんでいるのではないか。もしそうだとするなら、ここにこそ遠藤の祈りがあろう。美津子が出会った、我々の罪を赦し、〈人間の深い悲しみを受け止め、包みこんで流れ〉る、宗派を超えた〈母なる深い河〉に、彼らが抱か

NII-Electronic Library Service

Kurume SHIN-AI women's College

れ、その〈頬の涙〉が拭われるようにとの。カトリック作家遠藤周作の祈りである。

注記

※『深い河』の引用は『遠藤周作文学全集』第四巻（新潮社　一九九九年八月）に拠った。

（1）遠藤は『異邦人の苦悩』に「魂の領域に肉薄しなければ、人間の内部のすべては描けないという気がする」と記している。

（2）遠藤は三度の肺の大手術の苦しみの中で、「人生」を見る眼を獲得した。美津子が求めた〈確かなもの〉、〈根のある者〉等は「人生」からしか見出せないものであったろう。

（3）例えば加藤憲子氏の「遠藤周作『深い河』論」（「国文白百合」二〇〇七年三月）に見られる。

（4）〈玉ねぎ〉は〈イエス〉隠語。大津はかつて美津子のためにイエスを棄てた。しかし、自分はその罪ゆえにイエスからの召命を受けたのだと美津子に語っている。美津子のこの言葉はその時の対話を指している。

（5）〈人生〉における挫折以降の二人の姿勢の違いを、遠藤は「無意識」理解の相違にみ、『テレーズ・デスケルー』執筆当時のモーリヤックは「無意識を抑圧した罪の溜まり場所とのみ見なしていた」と指摘する。遠藤は「私の愛した小説」で「無意識にこそ救いが働く」と述べている。実際、美津子において「無意識」の発動はストーリーの展開の鍵を握る。

（6）『人生の同伴者』遠藤周作／佐藤泰正　講談社文芸文庫　二〇〇六年七月一〇日

（7）註3に同じ

（8）作品中に、〈玉ねぎという愛の河は、どんな醜い人間も、どんな汚れた人間も、すべて拒まず受け入れて流れます〉とある。

（9）『遠藤周作『深い河』を読む』山根道公　朝文社　二〇一〇年九月

（10）〈母なる河は生ける者も死せる者も受け入れます。聖なるという意味はそういうことです〉との、添乗員の江波の言葉

（11）美津子の認識した〈転生〉の意味はヒンズー教の説く内容とは異なり、遠藤の主張する「復活」の意味を指していると考えられる。

参考文献

遠藤周作『私の愛した小説』新潮社　一九八五年七月
遠藤周作『『深い河』創作日記』講談社　一九九二年二月九日
遠藤周作『満潮の時刻』新潮社　二〇〇〇年六月
遠藤周作／佐藤泰正氏『人生の同伴者』講談社　二〇〇六年
山根道公『遠藤周作の『深い河』を読む：マザー・テレサ、宮沢賢治と響きあう世界』　朝文社　二〇一〇年
柘植光彦（編）『挑発する作家』至文堂二〇〇八年
井上洋治『イエスのまなざし：日本人とキリスト教』日本基督教団出版局　一九八一年
佐藤泰正（編）『遠藤周作を読む』　笠間書店　二〇〇四年
マザーテレサ　半田基子訳『マザーテレサの言葉』女子パウロ会　一九七六年
古浦修子「遠藤周作の『深い河』」二〇一二年度遠藤周作学会全国大会　研究発表資料　二〇一二年九月一五日
加藤憲子「遠藤周作『深い河』論」　「国文白百合」二〇〇七年三月
モーリヤック『テレーズ・デスケルー』遠藤周作訳　主婦の友社　一九八八年三月

（二〇一三年三月三〇日受稿）

NII-Electronic Library Service